

教室における適切な L2 (英語) 使用をめざして: Code-switching の指針を考える

竹内 理 (関西大学) ● Takeuchi Osamu

1 はじめに

2013年4月、学習指導要領に基づき、高等学校において「授業は英語で行うことを基本とする」という考え方が実施に移されました。同年5月には、教育再生実行会議で、中学校に対してもこの考え方を導入する提言がなされ、6月には「第二期教育振興基本計画」の一部として閣議決定されました。また同年12月に出された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、高等学校に関して「基本とする」の部分が削除され、「授業を英語で行う」となり、中学校では「授業は英語で行うことを基本」とすると明記されました。このような教育現場における L2 (第二言語) 使用強化の流れは世界的なものがあり、英国や韓国においても L2-only の授業スタイルが強く推奨されるようになってきています (Lee & Macaro, 2013)。

一方、外国語教育学の研究をみると、L2-only の授業スタイルは、Direct Method の導入時期から主張されるようになり (Savignon, 1983; Widdowson, 1978)、ここ数十年では Communicative Approach の提唱にともない拡がりをみせてきました。しかしながら、昨今では L2-only の動きに対して疑問を呈する研究も多くなり (Levine, 2014; Macaro, 2001; Storch & Wigglesworth, 2003)、またその効果が必ずしも実証できないこと (Lee & Macaro, 2013; Lei & Hu, 2014; Macaro & Lee, 2013) ともあり、L1 (第一言語) の使用をまったく止めてしまうのではなく、目的に応じて L1 と L2 を切り替えるという code-switching の考え方が主流となりつつあります (Ur, 2012)。

2 Code-switching の指針

それでは、政策の方向性と研究の知見が上手く整合性を持たないこの状況下において、我々は何を指針にして英語教育に取り組んでいけば良いのでしょうか。

ここでは、外国語教育学におけるこれまでの研究成果の蓄積を基にしながら、「生徒の英語運用能力を伸ばす」という昨今の“実践指向型”英語教育の目的も観点として組み込み、次のような code-switching の指針を提案してみたいと思います。

- (1) 教室内では L2 使用を基本とする、ただし
- (2) 次のような場合には L1 も活用する
 - (a) 文法・語彙の導入と意識化のため
 - (b) タスク等の手順説明のため
 - (c) クラスの規律確立や関係性向上のため
 - (d) 動機づけや不安軽減のため
 - (e) 異文化理解の促進や言語意識向上のきっかけを提供するため

上記の指針 (2) は、言い換えれば、「L2 使用や L2 学習を促進する手助け、あるいは足場 (scaffolding) として L1 を活用する」という意味合いになります。

3 L2 使用を基本とする

「授業の目的は L2 運用能力の向上」と考える限り、学習者に L2 インプットをできるだけ多く提供することは、英語授業の必須要件となるでしょう。またコミュニケーションのツールとして L2 をとらえた場合、その使用場面と必然性を増やすことも重要となります。したがって運用能力向上という目的に照らして考える限り、「L2 使用を基本とする」という指針は外すことのできないものとなるでしょう。

次に問題となるのは、どの程度まで L2 使用の比率を上げるかということです。海外の研究では、おおそ 80% の L2 使用という数字があがっていますが (Levine, 2014)、これは学習者の L2 レベルや L1 構成 (日本では日本語のみが多い) により異なるものであり、参考目標値程度として扱うべきものでしょう。大切なのは、「授業の目的を達成するために L2 を最

大限に使用する」という視点です。またこの場合の L2 使用は、教員の L2 使用 (説明)、教員と生徒間の L2 使用 (対話)、そして生徒間の L2 使用 (対話) の合計から考えていく必要があるでしょう。

4 L2 使用促進の足場としての L1 使用

L1 使用を容認したとしても、これが際限なく拡がるという事態は、英語授業の目的から考えると望ましいものとは言えません。そこで Levine (2014) らは、その使用場面を限定する方向性を打ち出しています。この際に大切になるのが、上述 (2) の「L1 使用は、L2 使用や L2 学習促進の足場として機能すべし」という指針です。たとえば、L2 の語順を説明する際に、L1 を対照的に活用することで理解が進んだり、意識化が促進されたりするのであれば、この L1 利用は理にかなったものと考えます。また教員がフィードバックを L1 で提供することで L2 の誤りが効果的に防げるのなら、この L1 利用も問題がないということになります。同様に、語彙を導入する際に L1 (たとえば英和辞典) を利用することで学習の効率化がはかれるのであれば、これも容認するという考え方になります。

タスク等の手順説明も同様で、そのタスクを通して L2 運用能力向上という目的を達成しようとしている限り、手順の説明は効率を優先して L1 でも構わないということになります。ただしこの場合は、ALT と協力して実演をするなど、L1 使用を避ける方策も存在しており、そちらの方を優先すべきでしょう。

上記以外にも、教室内での規律維持や、ラポールの形成、動機づけや不安解消を行う目的で L1 を利用することは、中学生のような初級段階にある学習者の場合、それが常態化しない限りにおいて容認されるべきであり、また、このような場合に L1 を使用したからといって「オールイングリッシュ (All in English) の授業ではない」と非難するのは、的はずれと言わざるを得ません。

L1 使用を容認できるもう 1 つの場面としては、異文化やコトバに対する意識を深める際があげられます。このような場合、初学者を対象としては L2 使用が難しく、使用するとかえって理解を阻害するような事態が生じることもあります。そうした時には、L2 使用・学習促進の足場として、L1 を活用することが十分に考えられます。

5 おわりに

本稿では、「教室内においては L2 使用を基本としながらも、L2 使用や L2 学習促進の足場となり得る場合に限り、L1 も活用する」という code-switching の立場を示してきました。大切なのは授業の目的を達成することであり、L2-only に固執したり、逆に忌避したりすることではありません。ICT 機器などを駆使して、できる限り生徒たちの理解を補助・促進しながら L2 を積極的に使用し、同時にその限界を L1 で補うというこのスタンスこそ、激変期の英語教育に求められているものと言えるのではないのでしょうか。

参考文献

- Lee, J. H., & Macaro, E. (2013). Investigating age in the use of L1 or English-only instruction: Vocabulary acquisition by Korean EFL learners. *The Modern Language Journal*, 97, 887-901.
- Lei, J., & Hu, G. (2014). Is English-medium instruction effective in improving Chinese undergraduate students' English competence? *International Review of Applied Linguistics*, 52, 99-128.
- Levine, G. S. (2014). Principles for code choice in the foreign language classroom: A focus on grammaring. *Language Teaching*, 47, 332-348.
- Macaro, E. (2001). Analyzing student teacher's code-switching in the foreign language classrooms: Theories and decision-making. *The Modern Language Journal*, 85, 531-548.
- Macaro, E., & Lee, J. H. (2013). Teacher language background, code switching, and English-only instruction: Does age make a difference to learners' attitudes? *TESOL Quarterly*, 47, 717-742.
- Savignon, S. (1983). *Communicative competence: Theory and classroom practice*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Storch, N., & Wigglesworth, G. (2003). Is there a role for the use of the L1 in an L2 setting? *TESOL Quarterly*, 37, 760-770.
- Ur, P. (2012). *A course in English language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Widdowson, H. G. (1978). *Teaching language as communication*. Oxford: Oxford University Press.